



奈良女子大学長
今岡 春樹

文筆家
伊東 ひとみ

【学長対談】 「文理両道」の時代を切り拓く～古都で創る未来～

活躍する卒業生を迎えて

今岡春樹学長（以下 今岡）：本日は本学の卒業生である伊東ひとみさんをお迎えしました。ご活躍の内容や奈良女子大学の魅力について語り合いたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

伊東ひとみ氏（以下 伊東）：こちらこそよろしくお願いたします。

今岡：今年（2015年）5月に刊行されたご著書、『キラキラネームの大研究』（新潮新書）が話題になっています。何軒か書店をまわってもどこも売切れ、というような話も聞きました。

メディアでもかなり取り上げられていますね。日本経済新聞・週刊朝日・週刊文春・週刊現代・文藝春秋など各紙誌の書評欄や、朝日新聞の「天声人語」などで紹介されたと伺っています。さらに、テレビではBS日テレの「久米書店」でも拝見させていただきましたし、NHKの番組「視点・論点」でも伊東さんご自身がこの本に関連して「命名と漢字文化」のテーマで解説なさったそうですね。

伊東：はい。おかげさまで、あちこちでご紹介いただいています。

今岡：どこが注目されているのでしょうか。

伊東：「キラキラネーム」というのは、これまでの常識とは異なる漢字の読み方をしたり、これまでの日本語の名前にはなかった音の響きをもっていたりする、難読の名前のことです。

インターネット上や雑誌などでは、苺苺苺（まりなる）ちゃん・紗冬（しゆがあ）ちゃん・愛夜姫（あげは）ちゃんといった名付けを否定的に取り上げるも

のがほとんどですが、私の場合は、そういう命名の表層だけを見て批判的に論評するのではないところが特徴かな、と思います。日本語における漢字使用の歴史を古代からたどりなおして、今、命名の現場で何が起きているのかを解明しようとしたものですので、そのあたりに興味を持ってくださる方が多いのかもしれないですね。

奈良女子大学へ変化したこと／変わらないもの

今岡：私も拝読し、びっくりすることがたくさんありました。ご本の内容は、この対談の最後のほうでまた詳しくご紹介することとして、まずは、伊東さんご自身のことを聞かせいただきながら、本学の特徴や魅力について話し合ってくださいと思います。

意外なことに伊東さんは、本学理学部のご出身なんですね。

伊東：はい、そうです。1970年代後半、当時の理学部生物学科植物学専攻に在籍し卒業しました。

今岡：ご出身は静岡県とのことですが、なぜ、奈良女子大学の理学部を志望されたのですか。

伊東：高校生のころ、日本の古典にも、生物の世界にも両方に関心がありまして。それで、今考えると不遜なのですが、専攻は生物学にしておけば、古典のほうはなんとか独学でできるのではと考えました。古典を学ぶなら奈良、女子大でかつ理学部がある、ということで、迷わず奈良女子大学を志望校としたわけですね。中学・高校と女子校にいましたから、女子大ということに抵抗はなかったですね。



今岡 春樹（いまおか はるき）
工学博士。通産省工業技術院繊維高分子材料
研究所技官、奈良女子大学家政学部助教授を
経て、2001年奈良女子大学教授、2011年生
活環境学部長を歴任。2013年に奈良女子大学
学長に就任した。
専門研究分野はアパレル工学。

今岡…たしかに、女子大で理学部があるというのは結構珍しいのです。せっかくの機会ですから、この対談を読んでくださる方のために、奈良女子大学の紹介を簡単におきましょう。

伊東…はい。私もお伺いしたく思います。

今岡…本学は全国に二つしかない国立の女子大で、もうひとつは、お茶の水女子大学です。前身は、奈良女子高等師範学校。創立は1908（明治41）年で、それ以来、年配の方には、「ジョコーシ」というだけで通じる伝統ある名門です。中にいる者が、自ら「名門」と言うのもヘンですが……。

伊東…いえいえ、先輩方が築き上げられた輝かしい歴史があるのは事実ですから。

今岡…戦後、1949年に奈良女子大学として発足した当初は、文学部と理家政学部の2学部だったので。理家政学部がふたつに分かれたのは5年目の1

953年でした。それ以来、3つの学部からなるという構造はしつかり受け継がれています。ただし、家政学部は1993年に生活環境学部という名前に変わっています。「家政」という言葉がちよつと古くなっただけです。日本家政学会という学会はまだありますけど、アメリカは完全にホームエコノミクスという学会名称を変えてしまつて、衣食住の研究をほとんどやっていません。家族の問題と消費の問題、この2つしかやっていないからアメリカの場合は完全に文系の学会（American Association of Family and Consumer Sciences）です。

私が教えていたのは、コンピュータを利用した衣服系ですけれど、残念ながら日本の大学でも、ちゃんと衣食住を教えられるところが国立も含めてなくなつて、私立もだんだん少なくなつています。一方、本学では、学部名が変わつて、生活文化論や家族論も取り入れつつ、衣食住に関わる現代的な諸課題の教育と研究についてきちつとやりつづけている点で、国立女子大としての強みであり特長でもあります。

伊東…なるほど。わたしは在学中、当時の家政学部を外から見ただけですが、そのように説明していただく、よくわかります。

今岡…もちろん時代の要求によつてずいぶん変わつてきています。文学部も、たとえば社会学は当初はそんなに大きなプランチではなかったわけですが、この時代の問題を理論的に定式化して、そこから情報を得て、あとは統計的に処理をしたり、インタビュをしたりという応用にまでもつていくところが、今では大きくなりました。それから心理系や教育系

も学生さんの人気があると思います。もちろん、伊東さんが関心を持っておられる古典・ことば・歴史をはじめ地理・思想などの研究や教育は、文学部の核ともいえる部分ですから、当然、熱心に取り組みされています。

伊東…文学部の学科名やコース名などは、私の在学時からはかなり変わったように見えますが、人文の知を究め、それを学生に伝えるというスタンスは変わっていないですね。

今岡…組織上は理学部がいちばん変わっていないとも言えますが、去年、2つの大きな括りにして学部の中を2学科にしました。数物科学科と化学生命環境学科です。特に前者は、自分は物理が好きなのか、数学が好きなかわからないというのを一緒に入学してもらつて、2年生か3年生のときに分属したらという考えです。

それでも、女子学生がだんだん理学部に行かなくなつているので、今はいわゆる「リケジョ」で盛り返そうとしているわけです。これは単なるスローガンではありません。本年度から「理系女性教育開発共同機構（CORE of STEM）」というものをお茶の水女子大と一緒につくりました。理系教育のあたらしい授業実践や教材開発をするだけでなく、そもそもなぜ中高生の女子が理系ではなく文系を目指す傾向が長年つづいているのかという理由を根本から解明し、歪みをただそうという大きな視野でやっています。来年度からは、生活工学をキーワードにした共同専攻（大学院生活工学共同専攻）を立ち上げ、大学院生の募集も新規に開始しています。



理系／文系をめぐる動向と国立大学の存在意義

今岡…伊東さんはまさにこの理学部に來られたわけですが、まわりの反応はどうでしたか。

伊東…親が「女の子が理系に行っても……」と言うおたくもあるようですが、うちの両親はそういうことを全然言わなかったのです。

また、私は女子高だったのですが、理系がわりと得意な生徒には、学校のほうが理系への進学を勧めていました。ですから理系に行くことへの心理的なハードルは高くありませんでした。そして、実際に奈良女子大の理学部に入學して本当によかったと感じています。

今岡…なるほどそうだったんですね。それは恵まれた環境だったと思います。というのも、今、ドクターコースの物理とか数学をやっている学生に聞くと、ハードルがいちばん高かったのは家族だったと。「えっ、女の子でドクターまで行ってどうするの」というのをまず説得しないとなかなか行けないようですね。でもこれを単に家族そのものがハードルだと考えてはならないでしょう。家族にそう思わせるような社会通念があるところが問題なのです。

伊東…そういう通念がある以上、国立大学で女子大の理系を確保しておくというのはいちばん重要なことだと思います。

今岡…日本は諸外国と比べて、私はあまり諸外国と比べると好きではないのですけれど、それでも異様ともいえるほどに理系女性のパーセントが低いのです。アメリカは日本よりずっと多いのに、さらに多くないと社会がもたないという危機感をもっています。

す。日本でも、政策的な取組は以前より進みつつありますが、社会進出も含めて、理系はもともと多くなってほしいですね。

伊東…はい、そのとおりだと思います。ただその一方で、今の文科省の、理工系にシフトして、文系なんかやらなくていいというような考え方、あれは本当によくないと思いますね。

今岡…本当によくない。

その後、文科省の側は、「あれは皆さん誤解されていて、いけないというのではないのです」ということを言っています。「社会がこれだけ苦しくなって、みんなが一生懸命やろうとしているのに、人文社会系だからといって何も変えないというのはないでしょう」ということを言いたかっただけですか……。

伊東…そうなんですか。

今岡…とにかく、文系をなくしてしまえと解釈されるような話が出ただけでも乱暴なことですよ。あれでみんなに火がついて、文系は重要なんだという声が全国から上がったのは大切だと思います。どう考えてみても、人間が生きていくためには文系と理系の両方が必要なのです。だって理系だけで生きていけないのですから。

伊東…まさにそうです。そこを国立大学が率先してモデルを示してほしいですね。国立大なので社会に役に立つのはもちろん重要ですけど、即、役に立つという実学ではないものを担っていただきたいし、そういう人材も育ててほしい。さらに、理系でも地道な基礎科学はお金にはなりません、それを国立大学がやってくれないと、どこがやるのだと思います。それはぜひとも。

少人数教育の力と女子大の魅力

今岡…伊東さんご自身のお話にもどりますが、先ほど「入學してよかった」とおっしゃってくださいました。それはどんな部分ですか。

伊東…私が入學したときの生物学科は、植物学と動物学に分かれていた時代です。入學時点でどちらかを選ぶというかたちでした。私は植物が好きだったので、植物学を専攻しました。園芸的な植物ではなくて、生態学とか細胞学とか、生物学として植物を勉強したかったのです。

今岡…そうだったんですね。



伊東 ひとみ (いとう ひとみ)

昭和54年 奈良女子大学理学部卒業。古都奈良の歴史的風土に触発され、奈良新聞社文化面記者、雑誌・単行本の編集者を経て文筆家に。万葉集、源氏物語など上古・中古文に親しみ、著書に『漢字の気持ち』『恋する万葉植物』（共に共著）がある。



伊東…私が入った

この植物学専攻というのが、同期生が8人。授業で出欠をとる必要がありませんでした（笑）。まさに少人数教育です。すごく恵まれている。

これも国立大学ならではのですね。私立大学でクラスに8人しかないなんて、あり得ないですから。

今岡…女子大だということについては、いかがでしたか。

伊東…異性の目を気にせず勉強できて、一個の人間としての生き方を考えられる利点があるのではないかと思います。共学だと何かと気が散ることが多くて、ある意味うつとしい（笑）。今ときは勉強したくて大学に来る人ばかりではないから、そうとも言い切れない部分があるのかもしれない。勉強しなくても大学の4年間というのはそれなりに有意義に過ごすことはできるので、それがいけないとは言えないでしょう。でも、本当にいろいろな意味で勉強したいと思つたら、奈良で勉強するというのは、しかも女子大で勉強するというのは、すごくいい場所だと思います。



「文理両道」

今岡…理系を専攻された伊東さんが、日本語論を展開した『キラキラネームの大研究』を今回出版されました。理系と文系がお一人の中で融合している。最近耳にすることがある言葉を使うなら、まさに「文理両道」という感じですか。どんな風につながっているのですか。

伊東…生物学を4年間やってみてようやくわかったのは、わたしは結局、生物とは何ぞやみたいなことに興味があったのだ、ということでした。だから専門的にやっていくのに興味があったわけではなくて、どちらかというところって哲学ですよ。それは何ぞや」ですから。

本質的なものに関心を寄せ始めると、文系・理系を区別することの意味もなくなるような境地があつて、それが私のベースにあるのではないかと思います。

今岡…ほうほう、なるほど。

伊東…これは私の独断ではありません。新制大学としての発足時に本学に着任なさった世界的数学者、岡潔先生もつぎのようにおっしゃっています。数学は論理的なものだと思われているけれど、そのベースの情緒がなければ学問として成り立たない、と。まさにそういうことなのだと思います。

今岡…たしかに文理というのは、どちらもとことん探求するという点は似ています。ただ、文系と理系では山の登り方が少し違うというか、アプローチの仕方が違うのかなと思います。理系は積み上げ型で着実に前に進むうとしますが、文系は時々そもそも論や古典に立ち戻つて、ちやぶ台返しがありうる（笑）。

あ、それで伊東さんは、卒業後は奈良新聞に入られたと聞きましたが。

伊東…はい、そのことも「文」の世界を深く知るよい機会でした。文化面をやらせていただいた、とても勉強になりました。

職人さんを取材したり、文化財の研究をなさっている方を取材したり、奈良の文化を受け継いでいらっしゃる方たちに直接会うことができたので、それはすごく大きかったと思います。宮大工さんとか、墨や茶筌など伝統工芸にたずさわっている方とか、能面をつくっている方とか、日本画の上村松篁先生・淳之先生とか、奈良にはいろいろな先生方がいらつしやいますから。

奈良で学ぶ／奈良に学ぶ

今岡…なるほど、

取材を通して「奈良」の魅力に深く触れられたのですね。そういえば、奈良については、まさに先ほど名前が出た岡潔先生が、『春宵十話』という本の中でこんな風に奈良の良さを描いておられます。つまり、奈良と





いうのは日本文化の発祥地だが、それも、民族としての劣等感がなかった時代の文化が栄えたところ。だから、本当に良いところだ、と。そして、こういうところを保存しておく、良い趣味をつちかい、新しい文化を興す元にもなる。この町を中心に日本らしい文化を興したい、とおっしゃるのです。

伊東：岡先生の随想は、たしかにとても魅力的ですよね。

今岡：岡先生の随想の中には、仏教の用語が良く出てきます。彫刻や絵画にも造詣が深く、ミロのビーナスや百済観音、三月堂の月光菩薩の評論をしています。奈良の自慢はすばらしい仏像がたくさんあることです。

伊東：「奈良」とはそういう深みのある場所なのですよね。そこに本学が存在しているのは、とても意義深いことです。

今岡：はい、奈良にあるというのはとても大きいことなのです。

本学の特徴や強みがどこにあるのかということ、最近も、みんなで突き詰めて考えてみたのですが、結局とても単純なことに行き着いたんです。それは、国立大学法人奈良女子大学であること。つまり、「奈良」と「女子」と「国立大学」なんです（笑）。

「奈良」という得難い環境を最大限に享受しつつ、「女子」をエンパワーする教育をとことん追求する。そしてそれを、「大学」つまりユニバーシティとして普遍的な観点から、国立であることの強みを生かして学問的に究め、教育にも反映する。そういうことです。

数学なんて普遍的な学問だから、どこにいてもできる、と普通は考えがちです。しかし岡先生は違うとおっしゃる。地域研究はもちろん、一見普遍的な学問であっても、空間性は大事なということ。閃きが生まれるにはそれなりの環境が必要で、まさに奈良は理想的な場所だといえるのです。



学内建物からの風景。
本学記念館の向こうに東大寺と若草山を望むことができる。

伊東：たしかに、そのとおりです。久しぶりに奈良に来てみると、東京などとは全く異なる空間と時間の流れがあることがわかります。京都とも違いますね。

『キラキラネームの大研究』

今岡：「閃き」といえば、今日最初に紹介した「本、『キラキラネームの大研究』も、たくさん閃きが詰まっていますよね。最後に、このご本の内容をもう少し詳しくご紹介できませんか。

伊東：執筆のきっかけは、「光宙」という名と出会ったことです。何と読むかお分かりですか。「ぴかちゅう」です。人気ゲームポケットモンスターのキャラクターですよね。そういう名前を子供につける時代になっているとしたら、それはなぜなのでしょうというのが、疑問の始まりです。

今岡：私も、そんな名があるなんて、ご本を読んでびっくりしました。

伊東：ただ、この「光宙」という名が実在しているかどうかは不明なのです。そこで、自治体広報誌の赤ちゃん誕生祝い欄などをいろいろ調べてみました。すると、男の子では「禮示（ひろし）」や「聖煌（せいこう）」、女の子では「葉來（かんな）」や「妃莉（ひまり）」など、フリガナがないと何と読むのかわからないような名前がたくさんあることがわかってきました。しかも、今や、そういう名前が主流派になっている。

今岡：キラキラした名前は実際にあっただけで、でも、そういう動きを批判的に捉えるのとは異なる視点で書かれていることが特長ですよ。

伊東：はい。このような名前は、ときにDQN（ドキユン）ネームと呼ばれて、批判や揶揄の対象になることが多く、そのような声が巷に溢れています。でも私は、名付け親を無教養だと断じたり、名付けの善し悪しを恣意的に論じたりするのではなく、なぜそのよ



うな名前があるのかをさぐり当てたいと考えたのです。

今岡：そこで、名前の歴史を遡ることにされたのですね。意外に思ったのは、本居宣長には稽古(こほふる)、舎栄(いへよし)といった名前の弟子がいて、宣長は名前を覚えるのに苦労していたという話。さらに遡って、織田信長などは、奇妙丸・大洞(おおぼら)・小洞(こぼら)・酌・人などといったとんでもない幼名を自分の息子たちにつけていたというエピソードです。

伊東：ええ。また、今はオーソドックスに見える「和子(かざこ)」といった名前も、江戸期には「和」を「かず」と読ませること自体が逸脱でした。宣長はこれを問題視する文章を残しています。

これらはほんの一例ですが、要するに、もともと文字のない言語であった大和言葉の音を、漢字で表現すること自体に無理があるわけです。その結果、日本語表記の世界は、当て字的な漢字で表現する名前が生まれたり、特定の漢字に新しい音を当てはめたりする余地がある構造になっています。

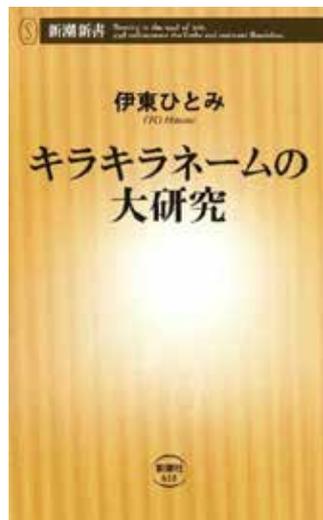
今岡：『枕草子』や『古事記』『日本書紀』などの古典にまで遡ってゆかれたり、漢字学者・白川静先生の業績を参照されたりしておられるのは、そういう問題意識からきているのですね。そのあたりまで拝読すると、つい、(キラキラした名前は今に始まったことではない。それは古くからあり、日本語表記の宿命なのだ。だから現代のキラキラネームにもびっくりしなくてよい)といった結論を予想してしまったのですが……。

伊東：ところが最終的な結論は、実はそうではない。たとえば、「腫」という文字をお考えになってみてください。「なまぐさい」という漢字ですよ。しかし今ではこの文字を名付けに使いたいというような感性が生まれています。

今岡：なぜなんですか。

伊東：月十星。すごくキレイな漢字だというわけです。

今岡：えっ、キレイ？



新潮新書 2015年5月刊

伊東：まさに「えっ!？」と絶句してしまいましたが、大きな誤認がここにはありますよね。「月」は空の月ではなく、「にくづき」だということが理解されていない。こういうようなことは、古代から昭和初期まではなかったわけです。知ったうえで、あえて使うということはあったかもしれませんが。

今岡：すると、同じキラキラしているにしても、決定的に何か違うものが現代の名付けにはある、ということなんですね。それは、何なのでしょう。

伊東：このことを、個々の親を非難したり、彼らの社会階層や学歴などで説明しても十分ではないのです。戦後の国語政策にかかわる、もっと構造的なものが

背後にはあります。

今岡：推理小説なら、まさに犯人を突き止める直前まできましたね。でも、ここでネタばらしをせずに、あとはみなさん是非この本を買って読んでください、ということにしませんか(笑)。

伊東：それはありがたいですね(笑)。

私としては、キラキラネームとは、近い将来の日本語がどのような方向に向かうのかを真つ先に教えてくれる「炭鉱のカナリア」ではないかと考えています。そのあたりも、ぜひ読み取っていただければ幸いです。

今岡：一見テーマはソフトですが、実は、身近な話題からどんどん深い森のなかに入っていく日本語論なんですよね。

さきほどつい「犯人」などと申しましたが、伊東さんのご本はかなり推理小説的どころがあります。データにもとづいて謎がつきつきと発見され、それを理詰めで説明していくというスタイルです。このあたりはまさに理系的思考なのかと感じます。

伊東：そうかもしれませんね。レンガを積み上げるように書くので、編集者の方にも、理詰めですねとよく言われます。

今岡：でも、扱っておられる話題は文系です。

伊東：わたしは東のほうの出身ですから、もし奈良女子大で学んで、奈良の地に住むということがなかったら、奈良や京都で書かれた日本の古典をこんな風に引用することはできなかったと思うのです。ここに住んでいても勉強でカバーできる部分もあります。が、風土を肌で感じて知っているということには大



きな意味があるように思います。

おわりに

今岡… 談論風発。いつまでも、お話ししたいところですが、事務方がそろそろ時間だと合図を送っています（笑）。

今、国立大学は、法人化後の大きな変革の時期に入っています。大変だ、困難だ、などという嘆いてしまうことが多い日々を過ごしています。

でも、伊東さんの「活躍ぶり」とか、この書物のような成果が、まさに「奈良女子大学」から生まれたのだと思うとんだか嬉しくなってきました。

伊東… そういう風におっしゃっていただけると、一層、この本を書いてよかったです。

私に限ったことではなく、同窓生などに会うたびに、みんなすごいな、やはり奈良女卒だけのことはあるなあ、と感じることが少なくありません。

今岡… そうなんですよ。さまざまな分野で活躍する卒業生が本当に沢山おられます。それもマスコミ的に目立つ「活躍」だけでなく、理系の企業での開発分野での貢献なども大きいですし、教員や公務員として日々着実に仕事に取り組んでいる人たちもいる。

そして、いわゆる専業主婦の立場におられる方たちも、さすがはナラジヨウOGと思うような、しっかりとした考え方やスタイルをもって生きておられる。そしてそこには、今日話題になった「文理両道」の資質を感じることも少なくありません。

伊東… はい、そうですね。

今岡… もちろん、科学的思考という意味では、文理を

区別すること自体が不要な場合もあるでしょう。さらに、文系的な感性を忘れない理系、理系的なロジックを身につけた文系……などなど、「両道」といってもいろんな形があるでしょうし、そんなに簡単に両方を会得できるものでもありません。

しかし、奈良女子大学という大学は、学部編成のバランスがよい上に小規模ですから、文と理、双方の素養を身につけるチャンスが多い。また、国立大学ならではの少人数教育で専門性も深められる。さらに、「国のまほろば」である奈良の地にあるということで、ほんものの事物・知識や経験に触れる機会もふんだんにあります。

そういう本学ならではの実績や伝統を消すことなく、「奈良」にある、「国立」の「女子大学」だからこそできることをもともとと追求して行きたい。それも、楽しく・明るく追いかけてほしいという気持ちができます。

こんな気持ちになったのも、今日、本学出身ならではの独創的な活躍をされている伊東さんにお目にかかり、ゆっくりお話できたからだと思います。おかげで、本学の底力も再認識できたように思います。

本日は、お忙しいところ本当にありがとうございます。ありがとうございました。

伊東… こちらこそ、お声掛けいただきありがとうございます。ありがとうございました。



平成 27 年 8 月 31 日 奈良女子大学学長室にて



～奈良女子大学なでしこ基金へのご協力のお願い～

奈良女子大学における学生支援、国際交流、教育・研究活動及び地域貢献などを充実・発展させるために、寄附をお願いしております。

お問い合わせ：奈良女子大学なでしこ基金事務室
〒630-8506 奈良市北魚屋東町
TEL 0742-20-3204 E-Mail nadeshiko@jimu.nara-wu.ac.jp



ならじよ Tomorrow vol.2

【学長対談】「文理両道」の時代を切り拓く～古都で創る未来～

発行年月日：平成27年10月29日

編集・発行：奈良女子大学 広報企画室（室長 小路田 泰直）

（連絡先：奈良女子大学総務・企画課）

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

TEL 0742-20-3220 E-Mail somu02@jimu.nara-wu.ac.jp